

資料提供

提供年月日	令和6年11月25日(月)
担当部課名	産業観光部 文化観光課
担当部署名	歴史まちづくり室 長浜城歴史博物館
担当者名	井並 悦子・福井 智英
連絡先	0749-63-4611

長浜市民入館無料！

企画展「長浜城歴史博物館 館蔵名品展」の開催について

このたび、長浜城歴史博物館では、企画展「長浜城歴史博物館 館蔵名品展—開館40年 資料収集の軌跡—」を開催します。本展は、博物館の所蔵・保管品のうち、書跡・絵画・工芸・歴史資料・考古の各分野を代表する資料を一堂に公開するものです。ふるさと長浜の歴史・文化をよく知っていただける絶好の機会となっています。

また本展開催にあわせて、長浜市民への無料入館を実施します。ぜひ市民の皆さまへの周知についてご協力をよろしくお願いいたします。

記

- 日時  
・令和6年11月30日(土)から令和7年1月19日(日)まで  
午前9時から午後5時まで(入館受付は午後4時30分まで)  
・休館日：毎週月曜日(ただし1/13(月)は開館し、14日(火)は休館)および年末年始(12/27[金]~1/2[木])
- 会場  
長浜城歴史博物館 2階展示室(長浜市公園町10-10)
- 入館料等  
①有料入館者  
個人 大人410円、小中学生200円  
団体 大人330円、小中学生160円  
※大人は、高校生以上  
※団体は、20名以上

②無料入館者

- ・身体障害者手帳、療育手帳・精神障害者保健福祉手帳等をお持ちの方  
およびその付添人1名。
- ・長浜市内・米原市内の小中学校の児童生徒。  
※いずれも、受付で証明となる書類の提示が必要です。
- ・長浜市民  
受付で、現住所のわかるものをご提示ください。

4. 内 容 詳細は、別紙をご覧ください。

---

## 企画展「長浜城歴史博物館 館蔵名品展—開館 40 年 資料収集の軌跡—」

### 基本情報

会 期：令和 6 年（2024）年 11 月 30 日（土）～令和 7 年（2025）年 1 月 19 日（日）

※会期中、一部資料の入れ替えあり

前期／11 月 30 日（土）～12 月 22 日（日）

後期／12 月 24 日（火）～1 月 19 日（日）

午前 9 時～午後 5 時（入館は午後 4 時 30 分まで）

休館日：毎週月曜日（ただし 1/13（月）は開館し、14 日（火）は休館）

および年末年始（12/27[金]～1/2[木]）

会 場：長浜城歴史博物館 2 階展示室

関連事業：展示説明会「学芸員、名品を語る。」

各分野の担当学芸員が、展示資料や博物館の所蔵品を解説。見どころや魅力なども紹介。

日時：令和 6 年 12 月 7 日（土）午後 1 時 30 分～

会場：長浜城歴史博物館 研修室

聴講料：無料（ただし、当日の入館料が必要。）

※申し込み不要。ただし、聴講は先着順。

入館料：①有料入館者

個人／大人（高校生以上）410 円、小中学生 200 円

団体／大人 330 円、小中学生 160 円 ※団体は 20 名以上

②無料入館者

・身体障害者手帳、療育手帳・精神障害者保健福祉手帳等をお持ちの方およびその付添人 1 名。受付で身体障害者手帳（ミライロ ID も可）等をご提示ください。

・長浜市内・米原市内の小中学校の児童生徒。受付で学校名のわかるもの（名札等）をご提示ください。

・長浜市民

本展では、「長浜市の宝」を紹介する展示趣旨から、長浜市民の方は無料でご入館いただけます。受付で、現住所のわかるものをご提示ください。

関連書籍：長浜市長浜城歴史博物館編『長浜城歴史博物館開館 40 周年記念 長浜城歴史博物館 館蔵名品展』

開館 40 周年を記念し、約 30 年ぶりとなる館蔵品図録を発行。40 年の収集資料のなかから歴史・美術工芸・考古等の分野を代表する品々を選出し、カラー図版と解説を収録。

・発行：令和 6 年（2024）3 月

・価格：1,800 円（税込）

・販売場所：長浜城歴史博物館 ミュージアムショップ

※郵送での販売も行っています。詳しくは当館ホームページをご覧ください。

お問い合わせ：

長浜市長浜城歴史博物館

〒526-0065 滋賀県長浜市公園町 10-10

TEL:0749-63-4611 FAX:0749-63-4613 E-mail:rekihaku@city.nagahama.lg.jp

ホームページ：<https://www.city.nagahama.lg.jp/section/rekihaku/>

## 展示趣旨

長浜城歴史博物館は、昭和 58 年（1983）に開館し、昨年・令和 5 年（2023）に開館 40 周年を迎えました。当館は開館以来、「湖北・長浜ゆかりの文化財」を方針に資料の収集を行い、公開してきました。

本展では、開館 40 年を記念し博物館の所蔵品および保管する文化財のなかから、書跡・考古・歴史資料・絵画・美術工芸の各分野を代表する資料を一堂に展示。博物館が 40 年にわたって収集した「長浜の宝」の数々を通して、ふるさとの豊かな歴史・文化をたどります。

出品リスト：別紙のとおり

### 本展の見どころ

- ★長浜の豊かな歴史・文化を物語る名品を一堂に公開！
- ★この展覧会を見れば、長浜の歴史・文化をより深く知ることができます。

## 主な展示資料

### Ⅱ. 考古資料

いえがたはにわ  
家形埴輪（越前塚古墳群 1 号墳出土、1 基、古墳時代中期[5 世紀頃]）

昭和 56～57 年（1981～82）に行われた工業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査では、52 基の円形・方形周溝墓と 5 基の古墳（円墳 4 基と前方後円墳 1 基）が検出されました。このうち 1 号墳から出土したものが、家形埴輪です。この家形埴輪は長浜市の古墳から出土した唯一の資料で、5 世紀頃に製作され、屋根以外は復元されたものです。

埴輪には、きりづまづくりひらやしき おおむね はふいた おしいた おしぶち切妻造平屋式で大棟・破風板・押板・押縁・棟木・板壁・入口などが表現されています。ひらやしきほったてはしらたてもの切妻造屋根のため、平屋式掘立柱建物を表現したものと考えられます。また、家形埴輪が作られた理由は、死者の住居説、被葬者が生前に暮らした建物を模した説、儀礼に用いた説などがあり、まだ不明な点もあり結着をみていません。

家形埴輪が出土した古墳は、直径 12 メートルの小規模な円墳（盟主墳めいしゆふんの円墳の越前塚古墳は直径 33 メートル）ですが、円筒埴輪も出土しており、被葬者は地域有力者の一族と考えられます。

[展示期間：前期・後期]



### Ⅲ. 歴史資料

#### 反反射望遠鏡 銘 一貫齋眠龍能当 (1基、天保7年[1836]、長浜市指定文化財)

鏡筒部下部に「天保七丙申歳中秋日一貫齋眠龍能当」と銘文が刻まれ、国友一貫齋による反反射望遠鏡の現存する4基のうち、2番目に製作されたと考えられ、通称2号機と呼ばれています。

雲台が5枚の縦型円盤でつながれており、円盤間に摩擦力が働くことで鏡筒部を固定しています。鏡筒部は上下にのみ動き、わずかに楕円形とすることで、所定の方向に回すとしっかり嵌めることができるようになっています。

また、雲台部のネジは方向転換の際に締めたり緩めたりと、動かすことが多いため、軟らかい金属の真鍮しんちゆうで製作されるのに対し、あまり動かさず固定する必要がある鏡筒部との接合部には、鉄製のネジが用いられるなど、使用することを前提とした細かな工夫がみられます。

反反射望遠鏡の内部には、大小2枚の鏡が設置され、この鏡で光を反射させることで対象を観察します。接眼部側に設置される中央に穴の開いたドーナツ型の鏡「主鏡」は、最初に光を受け取るため、その磨き方の良し悪しが望遠鏡の性能に大きく影響するものです。令和元年(2019)に行われた調査では、一貫齋が手作業で製作した主鏡は、現在市販されている工業製品的に製作されたものと同程度以上の性能を持つことが明らかになりました。

上田市立博物館蔵の1号機とは架台(鏡筒と脚の接続部)の接合方法、蓋の装飾などに違いが見られ、2号機は天体観測の機能を追求した意匠となっているといえます。また、この後に製作されたと考えられる望遠鏡は、2号機にはなかった鏡筒の向きを左右に変えられる機能が付け加えられ、製作のたびに進化を遂げていきました。

[展示期間：前期：後期]



## V. 絵画

### 《本朝名将百図》（2巻のうち1巻[乙巻]、紙本淡彩、江戸時代後期）

日本の神代から安土桃山時代までの歴史上名高い武将の肖像画を収めた上下2巻の巻物です。原則、1紙につき1人の武将が描かれ、像の右上には遠し番号と名前を記しています。また、図像によってはその人物の関わった代表的な戦いや年齢を記すものもあります。1番目の道臣命に始まり、日本武尊、坂上田村麻呂、源義家、平清盛、楠正成などが続き、最後の100番目を飾るのは、「太閤秀吉」こと豊臣秀吉です。本作は、神話時代から戦国時代に至る歴代の武将100人の名前と姿を時代順に眺めることができる、いわば名将図鑑といえるでしょう。

[展示期間：後期]

(部分図)



### 堀田正民筆《子連虎図》（1幅、絹本着色、文政3年[1820]）

宮川藩は、江戸時代に現在の宮司町に藩庁を置き、近江国内各所に所領を持ちました。藩主家は堀田氏で、歴代藩主には書画・学問に通じた人物が多くいました。なかでも6代目藩主・堀田正民（1791—1838）は、特に絵を描くことに長けた人物で、多くの作品を残しています。

本作は、松樹の下でじゃれあう虎の親子を描いた作品です。画面左に伸びる松の枝先には、鶴がとまり、子虎のうちの1頭は豹のような斑紋をもっています。このような作品は「鶴虎図」ともいい、中国や朝鮮半島で多く制作された吉祥画です。

表具の裏面には、正民の自筆で大番頭として二条城在番時に妙心寺・麒麟院で模写したと制作の経緯が記されています。さらに、写した作品は南宋皇帝・理宗の「子連虎図」であり、3代将軍・徳川家光の乳母・春日局が麒麟院に寓居した際に家光から下賜されたものであるといえます。この原本は現在、妙心寺・東海庵が所蔵する「子連虎図」であ

り、正民は原本に描かれた内容を虎の毛一本にいたるまで忠実に再現し、そこに墨の濃淡の使い分けや構図の整理といった工夫を加えています。

原本が伝来した麟祥院は、春日局の菩提寺として創建され、彼女の遠縁である堀田家とも交流をもっていました。実際、正民は本作の制作時以外にも大番頭在任中に何度か同院を訪れており、中国画の鑑賞・模写をした記録があります。麟祥院と堀田家の親交と正民の中国画への関心が窺える興味深い作品です。

[展示期間：後期]



## VI. 工芸

**大身槍 銘かうしゆうなかはま吉ゑもん作 長浜吉衛門作**（1本、安土桃山時代、長浜市指定文化財）

刃長が30 cmを超す大身槍で、安土桃山時代に製作されました。この槍の柄に差し込む茎には、優美な漢字交じりのひらがなで「かうしゆうなかはま吉ゑもん作（江州長浜吉衛門）」の銘が刻まれています。

羽柴秀吉が、長浜築城とともに造った長浜町には、<sup>なかたたらまち</sup>中鞆町という町名があります。この町は、長浜城の南、<sup>おおみやり</sup>外外堀と内外堀の間、つまり長浜城内に位置していました。鞆とは、製鉄の際に用いられる空気を送るふいごのことで、<sup>つか</sup>中鞆町には鍛冶職人が住んでいたと考えられています。残念ながら、作者である<sup>ながはまきちえもん</sup>長浜吉衛門（生没年不詳）はどのような刀工であったか、詳しいことはよく分かっていませんが、おそらくこの中鞆町に居住した刀鍛冶である可能性が高いと判断されます。

安土桃山時代の湖北地域には、坂田郡<sup>しもさかのしょう</sup>下坂庄（現、長浜市下坂中・浜町付近）に居住

した鍛冶集団・下坂鍛冶や浅井郡草野庄（長浜市鍛冶屋町付近）の草野鍛冶といった槍鍛冶が知られています。本作は、これらの鍛冶集団に加え、長浜町にも鍛冶職人がいたことを示す重要な作例といえます。

また、この大身槍は、近江の刀工研究者として名高い岡田孝氏により、当館へ寄贈されたもので、他に寄贈された7本の槍とともに長浜市の指定文化財に登録されています。

[展示期間：後期]

（部分図）

